

# 尾西地方における織物工業地域の 近代化と織物工場主

中 島 茂

## 1. はじめに

明治大正期の繊維工業が日本の基幹産業であったことは周知のところであるが、そのなかでも輸出振興による外貨の獲得と工業振興による輸入防遏の中心となっていた業種が、製糸業と紡績業、織物業であった。いうまでもなく、近代紡績業は、幕末から明治初期に欧米から導入された技術の習得と経験の蓄積を経て、1880年代に1万錘規模の大量生産が成功して以降、大規模な紡績工場が生産の主体となった。これに対して、製糸業は在来の座繰製糸から明治期には器械製糸へと近代化を遂げたが、生産の主体は中小工場であった。織物業についても、在来産地において幕末までの農家副業の生産から問屋制家内工業を経て、中小規模の手工業的工場生産が展開し、明治期終盤以降には、それらの中小工場の動力化が進展して機械制工場生産への移行が進んだ。

こうした在来産地の織物生産の近代化過程について、筆者は明治大正期における大阪府泉州地方の多数の織物工場主の輩出基盤を、農村の経済構造と結びつけて論じてきた（中島 2001）。それは大阪府が明治大正期における綿織物工業のわが国最大・最先進の産地であったことから、そこでの織物工業地域の形成過程とその担い手の存立基盤を解明することが、日本の工業化と工業集積地域を論じる上で欠くことのできないテーマであったからである。しかし、大阪府のみの事例ではなお地域の固有性に偏る危惧がある。このような農村織物工業の経営者層の輩出基盤については、中安定子（1962）による遠州機業の存立基盤や神立春樹（1974）による越前羽二重産地の経済基盤、神立晴樹・葛西大和（1977）による今治綿業の成立過程の解明といった先人の研究成果があり、筆者の研究もそれらの研究視角や研究手法から学んだものが多い。これらの研

究もわが国有数の織物産地を取り上げてはいるが、あくまで個別産地の事例であり、さらなる有力産地の実態解明の必要性が薄れたわけではない。

そこで本稿では、明治大正期にあって大阪府に次ぐ生産規模を擁し、後に国内最大の毛織物産地となった愛知県を取り上げる。なかでも県内最大の機業集積地を形成した尾西地方における中小織物工場の展開過程とそれを担った織物工場主の村内における経済的地位を明らかにして、工場集積による織物工業地域形成のあり方とその担い手たる織物工場主の特性との関わりについて検討したい。

もちろん、尾西地方の織物業に関する研究蓄積は豊富である。近代期における織物生産に関しては、古くは農商務省（1925）による調査報告があり、森編（1939）も尾西地方の織物業の発達史を詳述しているが、これらは近代期の資料の価値をもつものとしてみるべきであろう。織物業に関しては経済史からの研究の蓄積があり、幕末期以降の尾西地方におけるマニュファクチュア生産の展開事例として林（1960a、b）による研究がある。明治期に関しても塩沢君夫らによる一連の研究があり、農村の地主制の展開と織物業との関係を詳細に論じ（塩沢・川浦 1957、塩沢・近藤 1985）、石川清之も中島郡奥町における織物工場の担い手とその経済的地位について精緻に論じている（石川 1971、1984）。尾西地域に関する地理学的研究としては、川崎による一連の研究があり、織物生産および織物工場生産の詳細な地理的展開状況が示されている（川崎 1960、1964、1965、1967）。また、一宮市編（1977）や尾西市史編さん委員会編（2008）など、個別自治体史を通じた詳細な調査研究がなされ、産地業界史の貴重な成果も認められる。しかし、近代期愛知県における織物工場の地理的展開に関して、その定量的で詳細な把握が正確に行われているわけではなく、個別工場の操業状況や個別工場主の経済的地位に関しては、実態把握なお課題が残されている。

これらの課題に対して、筆者は愛知県における近代織物業の地域的展開を統計的にとらえ、明治大正期における尾西地方の織物生産の動向を、愛知県内の動きのなかに位置づけながら論じてきた（中島 2011）。さらに『工場通覧』などの「個別工場一覧」による同時期の愛知県内における織物工場の展開状況を

市町村単位で把握するとともに（中島 2014、2015）、近代織物工業展開期の同県農村部の農業生産と農民的土地所有状況に関しても、郡市単位での統計資料による分析を行い（中島 2016）、これに加えて、明治大正期における尾西地方の諸町村に関する住民の経済階層構成を、当該町村の「府県税戸数割賦課等級表」を用いて明らかにしてきた（中島 2018）。これらの分析・検討は、尾西地方を当該地域内の動向としてのみ捉えるのではなく、少なくとも愛知県内全体の動向の中に位置づけ、さらには全国的な動向との数量的な比較検討に結び付ける意味を持つものである。

こうした基盤的な分析の上に立って、個別織物工場<sup>1)</sup>が具体的にどのような生産活動を示し、それが時間軸と空間的広がりの中でどのような意味を持つものであったのか、そして、個別織物工場の工場主が各町村内で経済的にどのような地位にあって、当該町村の社会経済の近代化を牽引しようとしていたのか。本稿での検討課題は、これらの課題に応えるために、明治大正期における尾西地方の複数の町村を事例として、織物工業の展開と地域の近代化過程のなかで、その中心的担い手となった織物工場主の特性を明らかにするところにある。具体的には中島郡今伊勢村と丹羽郡西成村、葉栗郡浅井町を事例として、個別織物工場の操業動向を分析するとともに、それらの工場主の村内における経済的地位がいかなるものであったのかを検討して、地域の近代化過程を担った人々の特性を明らかにしたい<sup>2)</sup>。なお、本稿では尾西地方のなかでもまだ比較的農村的色彩の強い町村を対象としているが、織物工場の集積度も高く、より都市的な傾向の強い町村を対象とした検討・考察については、別稿を参照されたい（中島 2019）。

## 2. 明治大正期における尾西地方の機業地域特性

### (1) 『愛知県統計書』類の分析

尾西地方は、愛知県西部、かつての尾張国の北西部一帯の中島郡から葉栗郡にかけてを指し、現在の行政区画では一宮市や稲沢市付近を指す呼称である。明治大正期の郡市別統計数値では丹羽郡、葉栗郡、中島郡の3郡で示すが、中島郡が中心をなし、丹羽郡西部や葉栗郡西部辺りまでがその範囲と考えてよい

だろう<sup>3)</sup>。

まず、明治大正期における愛知県内の郡市別織物生産状況は、『愛知県統計書』類の分析からすでにみているが(中島 2011)、ここでは尾西地方の3郡を中心に概観しておこう。明治中期から大正後期までの種類別織物生産額をみると(第1表)、尾西3郡をひとまとめにしてみて、1895(明治28)年の324万円から1919(大正8)年の5,442万円へ16.8倍の増加を示しているものの、この間の愛知県全体の伸びは30.3倍に達しており、むしろ、尾西地方の織物生産が県内で占める比率は、同じ期間に40.6%から22.5%へ大きく低下している。この傾向は種類別にみても、在来の絹織物、絹綿交織物、綿織物すべてに当てはまり、新興の毛織物とその他の織物類のみが県内比率を上昇させている。愛知県内の動向としてみると、綿織物では名古屋市や知多郡の伸びが大きく、絹織物や毛織物でも名古屋市がその比率を高めている。尾西地方の郡ごとでは葉栗郡の絹織物と中島郡の絹綿交織および綿織物の比率低下が顕著な一方で、葉栗郡では絹綿交織がその県内比率を高める傾向にあり、中島郡では毛織物が急速にその比率を上昇させている。明治後期から大正期にかけて尾西地方では織物製造種類の転換が顕著で、3郡全体でみて明治中期に6割近くを占めた絹綿交織が、明治後半には綿織物に中心が移行し、さらに大正後期には生産額の過半が毛織物で占められるに至っている。

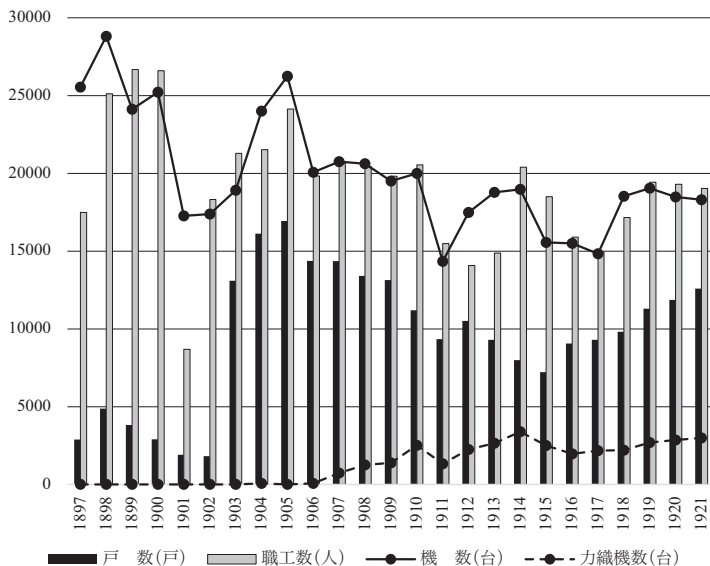
つぎに、機業統計から機業戸数・機数・職工数の動向をみると(第1図、第2図)、愛知県では1899(明治32)年~1902(明治35)年にかけて、ほとんどの郡で機業戸数の顕著な減少がみられるが、機数、職工数についてはほぼ同じ時期に停滞的ではあるものの、大きな落ち込みはみられない。尾西地方においても同様の傾向がみられ、とくに1901(明治34)年には戸数、機数、職工数とも大きな落ち込みがみられるが、この時期の政府による地租増徴が影響している可能性はあるかもしれない<sup>4)</sup>。この時期を除いても、尾西地方の機業戸数は1900年代に入る頃までは数千戸で推移し、1903年以降に15,000戸前後に急増しており、この点も統計捕捉上の問題か、1891(明治24)年に起こった濃尾地震の影響が長引いているのか、判断が難しい。統計上では1905(明治38)年の16,941戸が尾西3郡の最大数で、その後は大正初期にかけて漸減し、1915

第1表 尾西地方の織物生産額

年次	合計	絹織物	絹綿交織	綿織物	毛織物	その他
愛知県合計						
1895年	7,976.2	58.2	2,043.5	5,832.3	…	42.2
1899年	11,819.1	441.7	3,211.1	8,163.3	3.0	—
1904年	10,998.8	558.6	1,206.6	9,177.5	54.8	1.3
1909年	25,867.6	2,166.4	4,219.5	18,890.5	455.8	135.3
1914年	31,783.1	1,102.8	4,336.9	22,736.1	3,116.6	490.6
1919年	242,133.3	9,422.6	22,887.7	163,172.9	45,429.0	1,221.1
1924年	196,466.8	6,759.5	10,484.1	119,089.8	58,582.4	1,551.1
3郡合計						
1895年	3,241.3	24.1	1,928.0	1,289.1	…	—
1899年	4,884.5	357.5	2,922.3	1,624.1	—	—
1904年	3,612.0	407.7	1,106.9	2,072.6	11.4	—
1909年	9,559.4	1,217.9	3,068.3	5,162.2	106.8	4.1
1914年	10,139.6	618.4	3,325.4	5,198.4	973.6	23.8
1919年	54,427.2	2,084.0	15,989.7	19,482.8	16,633.5	237.3
1924年	45,670.3	2,391.7	7,255.1	11,637.3	23,710.7	675.5
丹羽郡						
1895年	83.9	4.8	4.2	75.0	…	—
1899年	391.9	211.1	19.9	160.1	—	—
1904年	881.7	283.8	2.4	595.1	—	—
1909年	2,378.9	637.4	48.8	1,681.4	7.2	4.1
1914年	2,091.2	497.1	104.7	1,480.5	0.2	8.6
1919年	6,228.8	1,118.9	171.4	4,918.3	0.0	20.1
1924年	7,779.6	2,040.4	617.5	4,469.7	521.6	130.3
葉栗郡						
1895年	353.1	19.4	211.4	122.3	…	—
1899年	1,016.2	146.4	575.9	314.1	—	—
1904年	501.7	122.4	76.4	303.0	—	—
1909年	1,881.9	514.3	436.7	922.3	8.6	—
1914年	1,553.7	108.7	912.5	530.0	2.5	—
1919年	6,414.7	466.3	3,970.3	1,695.3	104.2	178.7
1924年	5,445.9	317.9	2,987.1	1,443.7	457.0	240.2
中島郡						
1895年	2,804.3	—	1,712.4	1,091.9	…	—
1899年	3,476.4	—	2,326.5	1,149.9	—	—
1904年	2,228.7	1.5	1,028.2	1,174.6	11.4	—
1909年	5,298.6	66.3	2,582.8	2,558.5	91.0	—
1914年	6,494.7	12.5	2,308.1	3,187.9	971.0	15.1
1919年	41,783.7	498.8	11,848.0	12,869.2	16,529.3	38.5
1924年	32,444.7	33.4	3,650.5	5,723.9	22,732.1	304.9

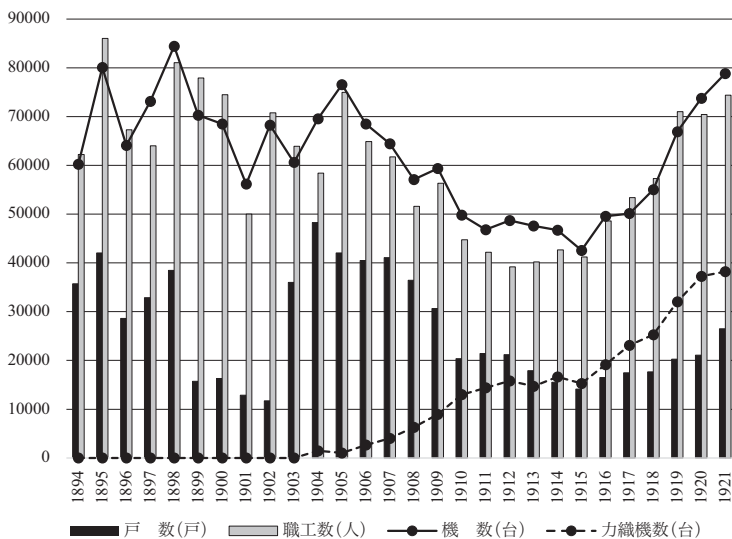
注) 金額単位は(千円)。—はゼロ。…は資料なし。なお、1924年の中島郡には1921年に市制施行した一宮市の数値を含めている。

出典) 1904年までは『愛知県勸業年報』、1909年以降は『愛知県統計書』より作成。



第1図 尾西地方の機業戸数・機数・職工数 (1897年～1921年)

出典)『愛知県勸業年報』、『愛知県統計書』各年分より作成。



第2図 愛知県の機業戸数・機数・職工数 (1894年～1921年)

出典)『愛知県勸業年報』、『愛知県統計書』各年分より作成。

(大正4)年の7,224戸を底として、大正中期にかけては増加に転じている。愛知県全体としての動向も機業戸数に関してはほぼ同様の傾向で推移している。なお、『愛知県統計書』類では、統計上毛織物に関する数値が1905年から記載され始めるが、これらの図には含まれない<sup>5)</sup>。戸数に関してはこの時期の全機業戸数が万単位となるのに対して、毛織物関係の機業戸数は数百の規模にとどまっており、全体的な機業戸数動向にあまり影響していない。

職工数と機数については、戸数ほどの変動はみられないが、尾西3郡の職工数は1899年の26,665人を頂点として、年による増減はあるものの大正中期にかけて漸減傾向にある。機数もほぼ同様の傾向で漸減している。力織機は統計上1904(明治37)年から記載が始まるが、じょじょに増加しつつも大正中期にかけては緩慢な増加にとどまっている。県全体の動向としては、職工数、機数とも大正初期にかけて漸減するものの、職工数については1912(大正元)年の39,194人を、機数については1915年の42,589台を底に、その後は増加に転じ、大正中期にかけて急速にその数を増やしている。とくに1907(明治40)年以降になると、力織機が急速に増加し、その増加が機数全体の増加を牽引していることがわかる。これは白木綿を主体とする知多綿業の急速な力織機化を反映したもので、先染めの縞織り産地である尾西地方での力織機導入の遅れとは対照的である。精緻な縞柄を出す高性能力織機の開発・導入は着尺需要の特性・動向次第であったと考えられる。

毛織物製造については、愛知県全体では1905年の戸数5戸、職工数200人、機数148台からほぼ一貫して増加を続け、1921(大正10)年には744戸、6,567人、6,478台(うち力織機2,029台)となって、大正期以降の急速な拡大が顕著にみられる。尾西3郡では中島郡がその中心であるが、1905年の2戸、118人、100台から明治期の緩慢な増加を経て、1912年にはいったん336戸、335人、1,235台に急増したあと、製造戸数は大正中期にかけて停滞し、職工数、機数も増加傾向にはあるものの、増減を繰り返すやや不安定な動きを示していた。しかし、1921年には戸数が207戸へ急増し、職工数は1,479人、機数は1,527台(うち力織機769台)となっている。とくに、1912年に導入の始まった力織機利用が拡大して、1920年以降は織機の半数以上を占めるに至っている。とは

いえ、毛織物用のヨーロッパ製広幅力織機は高価である上、国産化には原料鉄の品質の問題などもあって、力織機化は遅れ気味であった<sup>6)</sup>。大正中期にいたって、絶対数ではなお在来織物との間に大きな開きがあるものの、毛織物製造が急速に拡大している状況が認められる。

## (2) 「個別工場一覧」の分析

明治大正期の愛知県における織物工場の地域的展開についてはすでに論じているが(中島 2014、2015)、尾西地方の動向について概観しておこう(第2表)<sup>7)</sup>。愛知県全体の織物工場は1895年の109工場から若干の増減を伴いながらも1920年の847工場へ急速に増加し、職工数についても同期間に4,488人から36,574人へ大きく増加している。この間、1897(明治30)年には原動機を使用する工場が現れ、これもその数を増加させて、1920年には484工場と、織物工場全体の57.1%を占めるようになっていく。尾西地方に関しては、1895年の21工場から1890年代に急速に増加して1900(明治33)年には159工場に達し、職工数も同期間に1,786人から4,348人(前年の4,399人がこの間の頂点)に増加している。しかし、その後は増減を繰り返す状況で、工場数の頂点は1909(明治42)年の181工場、職工数では1920年の5,734人で、目立った増加はみられない。このため、明治30年代、1897年～1906(明治39)年にかけては尾西地方が工場数、職工数とも県全体の50%前後～60%前後を占めていたが、その後はその比率が年々低下する傾向にあり、大正中期には工場数で20%前後、職工数では15%前後を占めるにとどまっている。原動機使用工場も県全体のほぼ10%台にとどまっており、県内他地域に比して動力化の遅れが認められる。

尾西地方を郡ごとにみると、織物工場のほぼ3分の2、100工場前後は中島郡に立地しており、とくに同郡北西部の起町を核として、その周辺町村に集中している。明治30年代には葉栗郡が中島郡に次いでいたが、明治40年代以降には20工場前後で推移するようになり、代わって丹羽郡が30～40工場で推移するようになっている。これらを織物種類別にみると(第3表)、1895年～1920年の動向としては、期間を通じて全体の1～2割は絹織物工場で、明治



第2表 明治大正期尾西地方の織物工場の推移

年次	愛知県		尾西3郡	
	工場数 原動機数 -	職工数 馬力数	工場数 原動機数 -	職工数 馬力数
1895年	109 ( 0 )	4,488	21 ( 0 )	1,786
1896年	109 ( 0 )	4,035	27 ( 0 )	1,300
1897年	103 ( 2 )	5,143	27 ( 0 )	1,860
1898年	119 ( 2 )	6,152	59 ( 1 )	3,065
1899年	173 ( 0 )	7,736	104 ( 0 )	4,399
1900年	255 ( 12 )	7,838	159 ( 4 )	4,348
1901年	198 ( 13 )	5,763	111 ( 4 )	2,673
1902年	243 ( 7 )	6,606	148 ( 0 )	3,654
1903年	207 ( 19 )	5,852	124 ( 3 )	2,992
1904年	246 ( … )	7,323	117 ( … )	2,793
1905年	249 ( 18 )	7,472	112 ( 1 )	2,926
1906年	286 ( 42 )	8,931	132 ( 3 )	3,670
	36 -	…	2 -	…
1907年	341 ( 74 )	10,570	148 ( 9 )	3,691
	78 -	806.0	9 -	84.0
1908年	398 ( 111 )	11,699	160 ( 17 )	3,995
	117 -	1,251.0	17 -	198.0
1909年	478 ( 171 )	13,576	181 ( 22 )	4,742
	214 -	1,549.5	25 -	258.0
1910年	405 ( 191 )	11,367	139 ( 30 )	4,037
	208 -	1,912.1	34 -	358.5
1911年	548 ( 252 )	16,476	160 ( 29 )	4,579
	271 -	2,538.9	32 -	401.5
1912年	570 ( 229 )	21,416	138 ( 26 )	4,139
	300 -	5742.6	29 -	379.5
1913年	540 ( 237 )	17,939	117 ( 29 )	3,833
	271 -	4,000.0	33 -	354.5
1916年	582 ( 280 )	22,451	139 ( 42 )	4,260
	375 -	6,925.7	49 -	521.0
1918年	665 ( 343 )	31,121	131 ( 52 )	4,355
	582 -	10,459.6	80 -	728.0
1919年	721 ( 366 )	33,718	143 ( 70 )	5,031
	636 -	7,871.8	103 -	983.5
1920年	847 ( 484 )	36,574	170 ( 83 )	5,734
	756 -	13,180.0	110 -	1,169.5

注) 工場数欄のカッコ内は原動機使用工場数。単位は工場数(戸)、職工数(人)、原動機数(台)、馬力数(馬力)。…は資料なし。1906年は原表で原動機数未記載のものが多い。1905年までは原動機に関する記載がないため、原動機数-馬力数欄を省略。

出典) 1906年までは『愛知県勸業年報』、1907年、08年と10年～13年までは『愛知県統計書』、その他の年次は『工場通覧』より作成。

30年代半ば頃までは絹綿交織物工場が6割前後を占めていたものが、その後は徐々に綿織物工場の増加に押されて比率を低下させ、大正中期頃には2割前後にとどまっている。これらに対して、綿織物工場は明治30年代後半以降絶

第3表 明治大正期尾西地方の種類別織物工場

	総数		絹織物		絹綿交織物		綿織物		毛織物		その他・不明	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
1895年	21	1,786	1	108	13	1,276	4	172	0	0	3	230
1900年	159	4,348	14	228	71	2,458	60	1,138	1	265	13	259
1905年	112	2,926	12	222	47	1,428	42	913	2	118	9	245
1909年	181	4,742	34	719	45	1,282	64	1,789	4	222	34	730
1916年	139	4,260	21	445	59	1,536	42	1,480	15	751	2	48
1920年	170	5,734	25	430	29	558	73	3,021	29	1,400	14	325

注) 単位は工場数(戸)、職工数(人)。複数種類の品目を掲げる工場の場合は、筆頭品目の種類によって集計している。

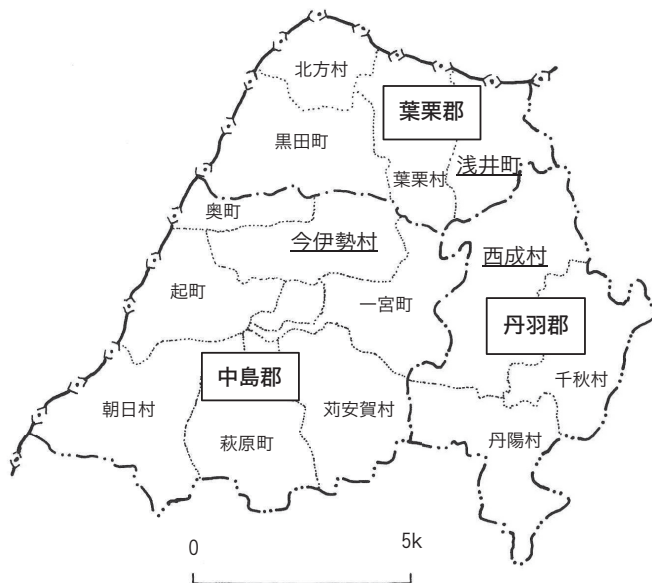
出典) 前表と同じ。

対数も増加して、織物工場全体のほぼ3～4割を占めるようになり、さらに大正期に入る頃からは毛織物工場が増加し始めて、大正中期には絹や絹綿交織の工場とほぼ肩を並べるところにまで達している。郡別では、絹織物工場は丹羽郡に多く、絹綿交織は中島郡に多い。綿織物は各郡に展開しており、大正期には各郡の中心的存在になっている。毛織物工場はほぼ中島郡に集中しており、尾西地方の中でも織物種類ごとに異なった地域展開を示している。

こうした尾西地方における織物生産と織物工場の動向は、個別機業家の織物工場創業のあり方や製造品目選択のあり方を集計的に示している。では、こうした織物工場の設立や操業を担った工場主は、尾西農村の中でどのような階層に属し、機業家としてどのような織物製造を行ってきたのだろうか。以下にそうした点をみていきたい。

### 3. 中島郡今伊勢村・丹羽郡西成村・葉栗郡浅井町における織物工業の展開

本章では、現在の一宮市に属する旧中島郡今伊勢村、旧丹羽郡西成村および旧葉栗郡浅井町を取り上げ(第3図)、明治大正期におけるこれら3町村の織物工場の展開と織物工場主の経済的階層を明らかにして、尾西農村における織物工業地域形成過程の状況を検討したい。具体的には町村ごとに個別工場一覧から得られる織物工場データと、各町村の当該時期における「戸数割等級表」の等級別課税対象者リストを照合し、織物工場主がどのような階層に属し、それがどのような動向を示しているのかを分析する。



第3図 今伊勢村・西成村・浅井町行政区画図(1906年現在)

注) 現在の一宮市域を範囲として示している。

出典) 筆者作成。

### (1) 今伊勢村の織物工場動向と工場主の特性

中島郡今伊勢村は、1889(明治22)年の町村制施行によって成立した神戸村、馬寄村、開明村が、1906(明治39)年の愛知県における町村大合併事業の際に合併してできた村で<sup>8)</sup>、郡北部に位置し、中島郡一宮町、起町、奥町、葉栗郡黒田町と境を接している。村東部(旧神戸村と旧馬寄村)には岐阜街道が南北に走り、明治中期には同街道沿いは一宮町からの家並みが連続するようになって<sup>9)</sup>。一方で村西部(旧開明村)は尾西地方最大の織物工場集積地である起町や奥町に隣接している。

この今伊勢村域に1895年～1920年の間に登場した織物工場は全部で26工場を数え、大字(旧村)別では本神戸が10工場と最も多く、馬寄が8工場、開明が6工場、新神戸が1工場、残る1工場は不詳である(第4表)。最も早くから「個別工場一覧」に記載をみるのは1895年のIM15の工場である。創業年月の上でも同工場が1882(明治15)年と最も古い。この工場は1904年～

第4表 明治大正期中島郡今伊勢村の織物工場主一覧

工場主	大字	創業年月	掲載年次	職工数	増減	織物種類	原動機	県税戸数割合等級				
								09年	11年	13年	16年	19年
IM1	馬寄	1899年2月	1909年～1920年	20.4	↗↘	絹綿→綿・綿毛 (19年～)	…	…	…	…	…	…
IM2	馬寄	1912年9月	1916年～1919年	10.7	→	絹綿→綿・絹綿 (19年)	…	…	…	…	…	10
IM3	馬寄	1913年3月	1920年	11.0		絹	…	…	36	36	31	28
IM4	馬寄 a	1900年11月	1913年～1919年	12.0	→	絹綿→綿・綿毛 (18年～)	…	19	19	19	19	19
IM4'b	同上	1905年11月c	同上	同上		同上	…	…	26	26	24	22
IM5	馬寄 d	1907年	1919年	10.0		綿	…	32	32	32	30	26
IM6	開明 e	1896年2月	1906年～1910年	33.2	↘	絹綿(08年～)	…	21	19	17	15	12
IM7	開明	1906年2月	1909年～1920年	12.0	→	不詳(絹綿16年)	…	23	23	27	…	…
IM7'f	同上	同上	同上	同上		同上	…	…	…	31	34	30
IM8	本神戸	1916年9月	1920年	11.0		不詳	…	36	36	36	36	33
IM9	馬寄	1895年9月	1900年～1903年	16.5	↘	絹綿	…	17	17	…	…	…
IM10	本神戸	1910年4月	1913年	13.0		絹	…	…	…	33	34	…
IM11	(神戸村)	1896年3月	1898年～1900年	13.0	→	絹綿	…	…	…	…	…	…
IM12	開明 g	1901年3月	1902年～1903年	12.0	→	絹綿	…	8	8	8	8	8
IM13	開明	1915年2月	1916年～1919年	18.0	↘	綿・絹綿(16年)→ 絹綿	…	…	…	…	…	…
IM14	本神戸	1901年5月h	1902年～1919年	14.4	↗↘	絹綿(02年)→綿	…	23	20	20	20	…
IM15	本神戸	1882年5月i	1895年～1920年	50.6	↘↗↘	絹(95年)→絹綿	…	3	3	3	2	2
IM16	本神戸	1903年4月	1909年～1920年	19.8	→	絹綿(11～16年)、 綿・絹綿(18年)	…	…	…	…	…	…
IM17	本神戸	1916年9月	1918年～1919年	14.0	→	綿(19年)	…	…	…	…	…	…
IM18	本神戸	1906年9月	1907年～1908年	17.5	↗	絹綿(08年)	…	27	29	…	…	…
IM19	本神戸	1914年2月j	1916年～1920年	32.5	→	絹綿→綿(19年～)	…	3	3	3	2	2
IM20	本神戸	1905年	1909年～1920年	22.8	↗	綿→絹綿(12年～)	…	25	23	23	22	18
IM21	新神戸	1873年	1909年～1920年	45.2	↗	年により絹・絹綿、 綿・他が入れ替り	受電 1919年～	1	1	1	1	1
IM22	本神戸	1918年1月	1919年～1920年	13.0	→	毛・絹(20年)	…	…	…	…	…	25
IM23	馬寄	1894年2月k	1900年～1920年	99.6	↗	絹綿→綿毛→毛 (12年～)	受電 1919年～	5	5	5	4	2
IM24	馬寄	1899年4月	1909年～1920年	22.7	↗↘	絹綿→綿毛→毛 (16年～)	受電 1919年～	11	11	9	8	8
IM25	開明 l	1901年3月	1918年～1919年	18.5	↘	綿	…	32	32	32	32	…
IM26	開明	1893年2月	1902年～1913年	24.6	↗↘	絹綿(不詳06年 ～12年)	…	…	…	12	15	17

注) 大字は工場所在地による。職工数は個別工場一覧に掲載されている期間の平均値で単位は(人)。増減は掲載期間中の職工数の増減傾向を示す。↗は増加、↘は減少、→は横ばい。原動機欄の…は導入なし。等差表欄の…は当該年度の上表にその氏名を見ないもの。a：等差表の住所は馬寄、b：1916年以降IM4より名義変更、c：1916年以降創業年記載変更、d：等差表の住所は小原(開明の一部)、e：等差表の住所は高野嶋(開明の一部)、f：1916年以降IM7より名義変更、g：住所は高野嶋、h：09年以降1893年など創業年月に揺れ、i：07年以降1907年3月、16年以降1857年など、j：1895年98年の記載もあり、k：08年9月以降合資会社化、l：等差表の住所は小原。

出典) 各年の「個別工場一覧」(『愛知県統計書』、『工場通覧』) および『一宮市今伊勢町史』、『(今伊勢村会) 決議書録』、より作成。

1906年を除く各年の資料に記載をみており、当初は100人前後の職工数を擁していたが、その後増減を繰り返しながらも減少傾向にある。製造品目はほぼ一貫して絹綿交織物で、1920年までの間に原動機の導入はみられない。織物工場は全体とすれば明治期に創業しているものが多く、創業年が大正期に入ってからのもは7工場を数えるに過ぎない<sup>10)</sup>。

今伊勢村では1893（明治26）、94年ころから創業する織物工場が増加し始め、たとえば、1894（明治27）年創業のIM23工場は、資料の上では1900（明治33）年以降に登場し、1904年と05年の資料には記載をみないが、職工数30人台から始まった工場は大正中期には100人台で推移している。当初は絹綿交織が製造品目であったが、1910年には綿毛交織物が、1912年には毛織物が品目に現れ、大正中期にかけて毛織物主体へと移行している。そして、1919年には受電による原動機の導入が始まっている<sup>11)</sup>。このほか、IM21とIM24の工場が同年に受電による原動機の導入を始めており、品目的には明治期から大正初期にかけては絹綿交織中心であったものが、大正中期頃から綿織物や毛織物への移行が始まっている。工場の職工数規模は、IM23のような100人台のものもみられるが、全体としては10人台から30人台程度の工場が主体となっている。なお、IM15やIM23は、石川（1971、1984）によってもこの地域の有力「マニュ」として取り上げられている。

これら織物工場主の村内における経済的階層を、今伊勢村の「県税戸数割賦課等差表」の等級区分からみると（第4表）、26工場中21工場の工場主23名について等級を確認できる（うち2工場は工場主名が代替わり等で変わっているが、新旧の工場主名とも等差表で確認できる<sup>12)</sup>）。同村の等級では9等ないしは10等以上が上位層にあたり、それに次ぐ22等ないしは23等あたりまでが中位層、それ以下の等級が下位層に相当する（中島 2018）。IM2、IM12、IM15、IM19、IM21、IM23、IM24はほぼ10等以内にあり、1等から3等という最上位層も含まれている。IM2のように1916（大正5）年以前の等級表にその氏名をみない工場主もいるが、IM23やIM24のように年を追うごとに等級が上昇している工場主もみられる。IM4、IM6、IM9、IM14、IM20、IM26は中位層にあたり、IM6やIM20は等級が上昇しているが、IM26は唯一等級が低下している。

IM3、IM5、IM7、IM8、IM10、IM18、IM22、IM25は下位層に相当する。今伊勢村の場合、上位層から下位層まで、織物工場主は幅広い経済階層にわたって存在していたことがわかる。全体として大正中期にかけて等級の上昇傾向を示すものが多くみられるが、日本経済の好況期にあたり、織物業でも全体として生産量が急増した時期であり、等級上昇の傾向はそうした活況を反映しているとみられる。

## (2) 西成村の織物工場動向と工場主の特性

丹羽郡西成村は丹羽郡の西端に位置し、西は中島郡一宮町、北は葉栗郡浅井町と境を接している。市制町村制実施時の丹羽郡豊原村（後に一部の大字が他村に組み込まれ、瀬部村に改称）、時之島村、赤羽村、穂波村、浅淵村が1906年に合併して成立した村で、翌年多加森村大字馬見塚が編入されている。昭和初期ころの資料でも、土地利用は水田、普通畑、桑園が広く見られ、現住戸数1,531戸中、1,384戸が農家（自作196戸、小作235戸、自小作953戸）で占められており、なお農村的色彩の強い村である<sup>13)</sup>。

この西成村域に1895年～1920年に登場する織物工場は、全体で13工場を数える。その詳細は第5表に示したが、13名の工場主のうち、3名は所在大字が不明で、後述するように、県税戸数割賦課等差表にもその名前をみない。そのほかの10名の所在大字については、西大海道が5名、春明が3名、時之島が2名となっており、村域北部に偏っている。とくに西大海道と春明は、旧穂波村に属しており、村内の特定地区に織物工場が集中していることがわかる。村内で創業年が最も古いものはNN1の1895年であるが、同工場が個別工場一覧に記載をみるのは1908年以降のことである。職工数規模は20名前後で推移しており、1913年を最後に姿を消すが、製造品目は絹綿交織で変化はみられない。個別工場一覧に最初に登場するのはNN10で、1899年～1920年までの毎年の資料に記載をみている。製造品目はほぼ絹織物に特化しており、職工数は10人台から始まり、大正期には30名前後に達しているが、この時期に原動機の導入はみられない。原動機使用工場は1920年時点で3工場（NN4、NN7、NN11）のみで、NN4とNN7は1920年に受電による電動機の使用が始まっている

第5表 明治大正期丹羽郡西成村の織物工場および工場主の戸数割等級一覧

工場主	大字	創業年月	掲載年次	職工数	増減	織物種類	原動機	県税戸数割等級			
								07年	11年	15年	20年
NN1	(不詳)	1895年9月	1908年～11年、13年	20.0	→	絹綿交織	…	…	…	…	…
NN2	(不詳)	1909年1月	1909年	8.0		絹綿交織	…	…	…	…	…
NN3	時之島	1905年4月	1909年、11年	8.5	↗	綿織物・他	…	…	…	22	20
NN4	西大海道	1916年2月、1907年11月他	1909年、13年～20年	23.3	↗	綿→絹綿・絹	受電20年	…	29	29	19
NN5	(不詳)	1909年8月	1909年	5.0		綿織物	…	…	…	…	…
NN6	西大海道	1907年4月、1908年2月他	1909年～20年	16.0	↗↘	綿→絹綿	…	…	23	19	20
NN7	西大海道	1908年7月、1913年2月	1909年、16年、20年	12.3	↗	綿→絹綿	受電20年	…	…	…	24
NN8	西大海道	1911年9月	1912年～18年	34.8	↗	絹綿・綿	…	8	9	9	10
NN9	西大海道	1904年8月他	1908年～20年	25.9	↗↘	綿→絹綿	…	…	15	9	8
NN10	春明	1899年1月、1897年3月	1899年～1920年	20.5	↗	絹織物	…	17	16	16	…
NN11	春明	1907年9月他	1907年～20年	24.0	↗↘	綿織物	油07～09年、瓦13年～	…	17	17	14
NN12	時之島	1904年7月	1909年～13年	10.2	→	綿織物	…	…	…	16	18
NN13	春明	1907年9月	1909年	7.0		絹綿・綿	…	…	…	…	29

注) 大字は工場所在地による。表の見方は前表参照のこと。原動機欄の油は石油発動機、瓦は瓦斯発動機を示す。  
資料) 『愛知県統計書』、『愛知県勲業年報』、『工場通覧』、『(西成村) 村会議決留』より作成。

るが、NN11は1907年の工場操業開始と同時に石油発動機を導入しており、明治末の3年間は原動機の記載がなくなるが、その後は瓦斯発動機を使用するようになっている。NN11による1907年の原動機導入は、尾西地方全体の中でも早い時期に属するもので、製造品目は当初から綿織物である。NN4とNN7については年によるが、綿織物もしくは絹綿交織が品目となっている。村全体では、絹綿交織と綿織物が製造品目の主体となっている。

これら織物工場主の経済的階層をみると(第5表)、NN1とNN2およびNN5は、西成村の戸数割賦課等差表にその名前がみられないが、NN1については『愛知県尾張国資産家一覧表(大正貳年八月再版)』の丹羽郡西成村の項に19等としてその名前がみられる<sup>14)</sup>。残る10名については、上位者で8等～10等、中位者で10等台半ば～20等、下位者で29等となっており、全体的には10等台後半から20等前後が主体をなしている。西成村の場合、等級区分上では、1等～17等あたりまでが上位階層、18等～22、23等あたりが中位階層、それら以下が下位階層に相当し、相対的に村内の経済的格差が小さい特性を有してい

る(中島 2018)。そのなかにあつては、工場主は各階層から現れているとはいえ、上位階層に含まれるものが多いといえよう。工場主は総じてみれば、大正中期にかけて階層を上昇させるものが多く、織物景気を反映しているとみられる。

### (3) 浅井町の織物工場動向と工場主の特性

葉栗郡浅井町は、西へ向けて流れる木曾川の南岸に位置し、東側は同郡宮田村、西側は葉栗村、南側は丹羽郡西成村と境を接している。市制町村制実施時に浅井村として発足し、1900(明治33)年に単独で町制施行して、1906年に北隣の瑞穂村を合併した後、1955(昭和30)年に一宮市と合併し今日に至っている。木曾川扇状地のほぼ扇端にあたり、この時期には桑園が広く展開して

第6表 明治大正期葉栗郡浅井町の織物工場と工場主の戸数割等差表等級一覧

工場主	旧村名	創業年月	掲載年次	職工数	増減	織物種類	原動機
AS1a	…	1900年2月	1900年	20.0		綿織物	…
AS2	(瑞穂村)	1897年5月	1918年～20年	15.3	→	綿織→綿織・絹綿(20年)	受電 1918年～
AS3	(瑞穂村)	1897年2月	1916年～20年	23.8	↗	絹織・綿織→綿織(18年～)	受電 1919年～
AS4	(瑞穂村)	1902年11月	1916年～20年	26.5	↗	綿織物→毛織物(20年)	…
AS5	…	1899年3月	1899年～1900年	14.0	→	綿織物	…
AS6	(瑞穂村)	1892年12月	1902年	9.0		絹綿交織	…
AS7	…	1893年3月	1896年	11.0		絹綿交織	…
AS8	…	1894年5月	1896年	14.0		絹綿交織	…
AS9	…	1899年1月他	1899年～1902年	13.0	→	絹綿→綿織(02年)	…
AS10	(瑞穂村)	1897年11月、 1865年2月他	1902年、06年、 1912年～20年	30.8	↗	絹綿→綿織(06年～)b	受電 1918年～
AS11	(瑞穂村)	1900年3月	1907年～08年	13.5	→	綿織物	…

注) 1900年、1903年は瑞穂村(1906年浅井町と合併)の資料。表の見方は前表参照。a: AS1は会社名で、工場主名不詳。b: 12年は種類不詳、16年のみ絹織物となっている。

出典) 『愛知県勸業年報』、『愛知県統計書』、『工場通覧』所収の「個別工場一覧」、『村会議案及決議綴』(瑞穂村役場)、『議案綴』・『町会議決綴』(浅井町役場)より作成。



いた。

1895年～1920年の間で浅井町を所在地とする織物工場は11工場を数えるが、このうちの6工場は旧瑞穂村の工場主である（第6表）。AS1は合資会社名で経営者個人名は明らかでない<sup>15)</sup>。個別工場一覧に記載をみる最も創業年の古い工場はAS10の1865年であるが、同工場の創業年月は資料ごとに異なることが多く、1897年とする資料もあるため、創業時期を特定することはできない。ただ、資料上の初出は1902年であり、1906年と1912年以降は毎年記載されている。資料に記載をみる最も古い工場はAS7、AS8の1896年である。同町では明治末には数年間資料上に織物工場の記載をみないが、大正期に現れる工場の多くは1900年前後の創業となっている。製造品目は1900年代にかけては絹綿交織が多いが、その後は綿織物が主体となっている。AS4は綿織物から1920

等差表等級										
1900年	03年	07年	08年	09年	11年	13年	14年	16年	18年	19年
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
9	7	9	11	11	11	11	12	11	10	6
13	16	17	15	14	14	12	12	11	10	6
17	13	…	16	15	15	15	15	15	12	12
…	…	12	14	14	16	18	21	…	…	…
9	8	10	12	11	11	11	11	12	12	13
…	…	…	8	8	8	8	8	8	8	8
…	…	21	22	22	23	…	…	…	…	…
…	…	8	10	10	10	10	10	10	10	10
3	2	4	5	5	5	5	5	5	5	4
…	10	9	11	11	11	11	15	15	15	15

年には毛織物に変化している。原動機の使用はAS2とAS10が1918年から、AS3が1919年から始まっており、いずれも受電による電動機の使用である。各工場の平均職工数は10人前後から大きいものでも30人前後で、小規模なものが多。

浅井町の戸数割賦課等差表（1900年と03年については旧瑞穂村の等差表）から工場主の等級をみると、全体的には10等前後のものが多いが、AS8は20等前後、AS5は明治末から大正期にかけて20等前後まで等級が下がっている。いずれも工場主として名前をみるのは1890年代頃で、等差表に名前をみる時点で織物業に関わっていたかどうかは不明である。AS10は5等以上にあり、従来から織物業に関わって財をなしていると考えられる。浅井町の等級区分では特等～7等あたりまでが上位層、8等前後～14等あたりまでが中位層、ほぼ15等以下が下位層に相当する（中島 2018）。したがって、織物工場主もしくはその経歴を持つものの多くは中位層から上位層に相当している。大正中期にかけて織物工場主として名前の挙がっているAS2、AS3、AS4、AS10はいずれもその時期に等級が上昇しており、織物業の好況が所得に反映していると思われる。

#### 4. おわりに

本稿では、明治大正期における尾西地方の織物工場簇出地域の中から、比較的農村的な色彩の強い3町村を事例として取り上げ、それらの町村で創業した個別織物工場の操業状況の動向を分析し、その工場主の町村内における経済的地位がどのようなものであったのかを検討してきた。以下ではその結果をまとめるとともに、織物工業地域近代化の条件や地域特性について展望したい。

近代的織物工業地域の形成は、当該地域における原動機を使用した工場制生産の一定程度の展開が指標となる。明治大正期においては、大阪府の和泉地方や愛知県知多地方で明治40年代に入る前後から急速な力織機導入が進み、その典型的な事例といえるが、尾西地方の織物工場では、原動機の導入が大正中期以降に本格化するようになり、上記産地より10年以上の後れがみられる。しかし、これは歴史的な発展段階の後れというよりも、先染め綿織物という産地

特性のもとで、在来の絹・絹綿製品の将来的な需要動向を見通せず、製造者が服地毛織物生産の本格化とそれに対応した力織機の開発・導入という時代状況をにらみつつ、動力化に踏み切るタイミングを遅れさせた結果とみることができる。尾西地方の絹綿交織を主体とした織物工場は、手織機による自工場内での製織（内機）と「出機」（織元として農家副業などの賃織業者へ製織発注）の組み合わせによって、需要動向に合わせる生産形態を大正期まで続けていた。

本稿で取り上げた今伊勢、西成、浅井の3町村においても、原動機の導入は、例外的に早いものも見られるが、ほぼ大正中期の1919年か20年から一部の工場で始まったにすぎない。それも綿織物や毛織物に転換した工場において認められる傾向である。

これらの町村の織物工場主は、その経済的階層がほぼ村内中位層から上位層にかけての村民であり、織物工場の経営によってその階層が上昇する者もみられるが、工場創業以前から一定の階層の高さであったことも浅井町（旧瑞穂村）などの事例から確認できる。ただし、今伊勢村のように、最上位層から下位層まで多様な階層から工場主が現れている事例も認められる。この点は、本稿では取り上げなかった中島郡奥町の場合でも認められるが、奥町はほぼ町場で農村的集落の事例とは捉えにくく、その詳細については別途検討する必要があると判断される。

明治大正期の尾西農村では、小作地率の上昇による地主制の進展が認められる一方で、50町歩を超える地主層は3郡合わせても数名しかおらず、中小地主が主体となっており、農民層全体でも自小作層比率が高く、零細な土地所有農民が多い特性があった（中島 2016）。そうした中での村内中位層は、自作上層から手作り地主層を想起させ、彼らが織物工場経営層を主として担ったとすれば、尾西地方における中小織物工場の簇出は、こうした尾西農村の社会経済構造を反映したものとみることができる。そして、このことは筆者が大阪府泉北郡でかつて検討した織物工場経営層の社会経済階層ともおおむね符合するものであるといえよう（中島 2001）。

本稿での検討課題は尾西農村における中小織物工場主の担い手がいかなる社会経済的地位にあったのかの検討であった。しかし、尾西地方の織物工場の最

大集積地は起町とそれに隣接する地区であり、上述の奥町を含めてその集積の実態と経営者層の担い手を検討する課題が残されている。さらに尾西毛織物業が全国最大の産地となるに当たって、関西、東京両市場との関係性がどのように構築されていったのかも大きな検討課題である。これに加えて、愛知県内において尾西の毛織物業と知多の綿織物業、三河の製糸業といった近代期における繊維工業をめぐる地域的機能分担がどのように成立していったのかも大きな関心事であり、課題は尽きないといえよう。

## 注

- 1) これまでの拙稿と同様に、本稿で取り上げる「工場」とは、原動機使用の有無を問わず、「個別工場一覧」に記載をみるすべての織物工場を対象としており、工場制手工業であるか、機械制工場であるかを問わないこととする。したがって、本稿では「マニファクチュア」あるいは「マニユ工場」といった従来経済史学で用いられ、それ自体の概念規定を巡って論争のなされてきた用語は用いない。もちろん、個別農家で分散の生産から特定作業場での集積の生産への変化や無動力から動力を用いた生産への変化は、経営的にも技術的にも飛躍的变化であることは間違いないが、「時代区分」の概念にとらわれることなく、特定地域の工業化過程を地理学の立ち位置から検討したい。なお、『愛知県統計書』、『愛知県勤業年報』では、原則として職工数10人以上のものを「工場」として捕捉している。
- 2) 尾西織物業に関しては、塩沢や石川らによる中島郡奥町を事例とした詳細で精緻な研究が行われているが、この地方の織物工場の最大集積地である起や奥は、近世期以来の都市化の進んだ集落であり、商人階層からの織物業への参入とその結果としての土地所有（寄生地主化）が大きな特質となっていると考えられる。本稿ではそれらの町村の周辺に位置している、より農村の性格の強い地区を対象にして、そこでの織物工場経営層の特性解明に焦点を当てている。
- 3) 現在の一宮市は中島郡以外に旧葉栗郡西部と旧丹羽郡西部の町村を含んでおり、その範囲を指している。また、中島郡の南にある海部郡は、津島を中心とした織物生産地をなしていて、海部郡北部の佐織村は綿織物産地としても名を馳せたが、本稿では対象範囲に含めていない。
- 4) 明治政府は1899（明治32）年から5年間にわたって財源不足を補うため、地租の税率引き上げを行っている。農村部でその影響が及んでいることは想像に難くない。
- 5) 機業統計の上では、絹・絹綿・綿・麻・織物雑類が一括りで扱われるのに対して、「毛織物及其交織物」は独立項目として記載されている。ただし、尾西地方の機業のように絹綿交織と毛織物をともに扱っている機業家も存在しており、両者の数値を単純に合計する

- と、重複した数値となるため、ここでは毛織物関係を含まない数値のまま提示している。
- 6) 一宮市三条の元機業家鈴木貴詞氏によれば、第1次世界大戦（1914年～1918年）の勃発によって、ヨーロッパからの毛織物用広幅織機の輸入が途絶し、尾西地方でも国産化が図られたが、素材鑄鉄の低品質など力織機開発には時間がかかったという。
  - 7) 愛知県に関する「個別工場一覧」は、『工場通覧』のほか、『愛知県勸業年報』および『愛知県統計書』に掲載をみるが、1895（明治28）年から利用可能で、1920（大正9）年までのうち、1914年、1915年、1917年の3ヶ年分は資料が得られない。なお、各年の利用資料については、第2表の出典を参照のこと。
  - 8) 1889年の市制町村制施行以降の明治期における愛知県内の市町村および町村合併の事情については、拙稿（2013）を参照されたい。
  - 9) 明治大正期における今伊勢村を始め、ここで取り上げる3町村の状況については、拙稿（2018）を参照されたい。
  - 10) 個別工場一覧に記載の創業年月は、「工場」の創業年月であるのか、織物関係の事業（問屋や織元など）を始めた年月であるのかは判然としない。創業年と個別工場一覧に記載の始まる年次との間かなりの開きがある場合、職工数規模が10人に達していなかったことによる未掲載か、事業開始と「工場化」との時間差であるかはこの資料のみではわからない。ただし、今伊勢村で大正期に入って個別工場一覧に掲載される織物工場はすべて創業年も大正期のものである。
  - 11) 今伊勢村での電力供給事業は1912（大正元）年から始まっている。詳しくは拙稿（2015）参照のこと。
  - 12) 名義上の工場主名が戸主とは限らないため、「県税戸数割賦課等差表」に一致する氏名が見つからない場合もありうる。工場主が村外者である場合も当然当該村の等級表にはその名をみることはない。
  - 13) 昭和初期に刊行されたと思われる村勢一覧（1枚もの、村域全図つき）による。ただし、この資料には資料題目、刊行年の記載がなく、時期については、記載内容からの推定によっている。
  - 14) 竹内則三郎『愛知県尾張国資産家一覧表』、興信倶楽部、1913年、p. 260。同書によれば、1912（大正元）年の年間所得を基準に特1等～特5等、1等～25等の区分を行い、19等は所得金額1,000円（18等は1,500円、20等は900円）となっている。
  - 15) 一宮市浅井町史編纂委員会編（1967、p. 471）によれば、「明治二十年頃東浅井で森林平・岩田太兵衛等が中心となって株式組織で織物業を創めたが、永続しなかった」とあるが、年次がずれており、該当する工場かどうかは不明である。ちなみに森林平は浅井町きっての名家で同町の戸数割等差表では特別1等にあっており、岩田太兵衛は13等～15等に該当している。

文献

- 石川清之（1971）「産業資本確立期における織物業の展開と寄生地主制——一宮市奥町を素材として——『土地制度史学』14-1（通巻53）、pp. 31-61
- 同上（1984）「独占資本段階における尾西地方の織物業と地主制」『社会経済史学』49-6、pp. 52-86
- 一宮市編（1977）『新編一宮市史 本文編 下』、一宮市
- 一宮市浅井町史編纂委員会編（1967）『一宮市浅井町史』、一宮市浅井支所
- 川崎敏（1960）「幕末より明治初期における尾西機業の地域形成」『地理学評論』33-6、pp. 312-327
- 同上（1964）「産業革命期の尾西機業地域」『産業革命期前後の歴史地理（歴史地理学紀要6）』、日本歴史地理学研究会、pp. 41-60
- 同上（1965）「一宮機業地域における労働力吸引圏に関する地理学的研究」『市邨学園短期大学開学記念論叢』、市邨学園短期大学、pp. 255-328
- 同上（1967）「尾西毛織物工業地域の形成——大正・昭和初期——」『社会科学論集』、市邨学園短期大学社会科学研究会、pp. 1-39
- 神立春樹（1974）『明治期農村織物業の展開』、東京大学出版会
- 神立春樹・葛西大和（1977）『綿工業都市の成立』、古今書院
- 塩沢君夫・川浦康次（1957）『寄生地主制論』、御茶の水書房
- 塩沢君夫・近藤哲生編（1985）『織物業の発展と寄生地主制』、御茶の水書房
- 中島茂（2001）『綿工業地域の形成——日本の近代化過程と中小企業生産の成立——』、大明堂
- 同上（2011）「明治大正期愛知県下織物生産の統計的分析」『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』2、pp. 1-32
- 同上（2013）「明治期愛知県の市町村再編について」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』14（日本文化専攻編4）、pp. 1-26
- 同上（2014）「明治期愛知県における織物工場の地域的展開」『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』5、pp. 51-83
- 同上（2015）「大正期愛知県における織物工場の分布特性」『愛知県立大学日本文化学部論集（歴史文化学科編）』6、pp. 1-26
- 同上（2016）「明治期愛知県農業の地域性に関する経済統計分析」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』17（日本文化専攻編7）、pp. 1-36
- 同上（2018）「明治大正期行政文書からみた尾西住民の階層構成——愛知県尾西地方5町村の県税戸数割等差表の分析から——」『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』4、pp. (1)-(28)
- 同上（2019）「近代期尾西地方の織物工場と織物工場主の特性——中島郡起町三条・奥町・葉栗郡黒田町を事例として——」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』20（日本文化専攻編10）、pp. 1-22

- 農商務省工務局（1925）『織物及莫大小に関する調査』、工政会出版部
- 林英夫（1960a）『近世農村工業史の基礎過程—濃尾縞木綿織物史の研究—』、青木書店
- 同上（1960b）『尾西と西濃の織物業』（地方史研究協議会編『日本産業史大系 5 中部地方  
篇』、東京大学出版会、pp. 26-53、所収）
- 尾西市史編さん委員会編（2008）『尾西市史 通史編 上巻』尾西市役所
- 森徳一郎編（1939）『尾西織物史』、尾西織物同業組合